

～教授編～

実践神学分野 教会心理学
臨床教会教育 担当教授

ウェイン・ジャンセン



「東京神学大学の学問的な水準は高く、アメリカの主要な神学校にも引けを取りません」とジャンセン教授は言います。ただし「伝道者にはアカデミックな知識だけでなく、人と寄り添う人間性も求められます。そのためには、自分を見つめる学びが重要です」と続けます。

その一例として、ジャンセン教授の担当する「教会実習」の授業では、「会話の逐語記録の検討」を行います。これは、学生同士がペアになって悩みを聴き合い、その会話を逐一記録し、その後クラス全体で「なぜこのように言ったのか」「なぜこのように言わなかったのか」をディスカッションするもの。

「指摘されていい気持ちはしませんが、自分を知るには大切な作業です。もし牧師自身が相談者と似たような課題を抱えていて、しかもその扱い方がわかっていない場合、牧師は自分を防衛するでしょう。この場合相談者との会話は表面的になるか、別の軽い話題に終始し、相手を助けることはできません。教会の場に出てからこのような過ちを犯さないために、授業の中で自分はどのような人間なのか、どのような弱みを持っているのかに目を向けます。この作業は辛いものですが、乗り越えて初めて人に対してオープンになれるのです」

深刻な相談に対して「聖書にはこう書いてある」とか「〇〇という神学者はこう言っている」といった知識を話しても、あまり助けにはならないと教授は言います。相談者はむしろ落胆し、牧師自身も助け手となれなかったことに自責の念を感じたり、焦燥感を持つこともあるでしょう。

「私が専門とするパストラルケアは、教会の宣教伝道とはちょっと違います。何よりも重要

人を助けるには、まずあなたが心を開いていることが重要。
「自分を見つめ、自分を知る学び」が欠かせません。

なのは癒されること。癒しとは、“つながりの回復”です。相手に無理に悩みを吐き出させる必要はなく、場合によっては、挨拶だけでもいいのです。つながりを断たれて孤独な状態にある人を、キリストの実存のもとに再びつなぎ直す働きです」

若き日に召命について悩んでいたとき、ジャンセン教授自身も神との関係の回復を経験したそうです。「ちょうどヨナ書の第2章を読んで祈っているときでした。ここに祈りを聞いてくださる神さまがいる。その存在を感じたとき、神さまとの関係が新しくなり、悩みは変わらず存在していても、心に癒しがもたらされました」

「私も、あまりにも辛い状況にある人を前に言葉を失うことがあります。何もできないことに打ちひしがれます。しかし、そんなときこそ私たちは福音を忘れてはなりません。相手に押し付けるのではなく、自分が福音を信じて生きていることを喜ぶ。人は喜びを持つ人に近づきたい、仲間に入りたいと思うものです。そこに関係性ができてくるでしょう。東京神学大学で学ぶ神学生には、自らを見つめる学びの先に、『喜びに溢れている人生』を発見して欲しいと願っています」

Wayne Jansen

アメリカ・ウィスコンシン州生まれ。RCA（アメリカ改革派教会）派遣の準宣教師として日本のキリスト教系中学・高等学校で4年間英語講師を務めた後、ウェスタン神学校で学ぶ。卒業後、インターンとして精神病院のチャプレンを務め、その後再来日し聖隷三方原病院で7年間臨床教会プログラムに従事。2002年に東京神学大学兼任。近隣の病院での臨床教会実習も担当。